

## 「愛する」

ヨハネの手紙第一

2:7~17

### はじめに

私たちの使う言葉には、素晴らしいもの、美しいものがたくさんあります。その中でも代表的なものが「愛、愛する」という言葉ではないでしょうか。このヨハネの手紙の筆者である使徒ヨハネは、同じく自身が記した福音書の中で、自分を「イエス（イエシュア）の愛された弟子」と記しており、今日においても彼は「愛の人ヨハネ」と呼ばれており、「愛」という言葉に結びついた人物として有名です。しかし「愛の人」と聞くと普通、優しい温厚なイメージを持ってしまいがちですが、意外にも彼は荒々しく怒りやすい性格で、「雷の子」というようなあだ名で呼ばれるほどの人物であったと伝えられています。そんな彼が「愛する者たち」に宛てて書き送った手紙がこの「ヨハネの手紙第一」です。ここに書き記された内容に目を留めながら、聖書が示す「愛する」という言葉の意味について、改めて考えてみたいと思います。

### 1. 新しい命令

【新改訳改訂第3版】

I ヨハネ

2:7 愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。

ヨハネは、今自分が書き述べている、またこれから述べる内容は、聞いたことのないもの、耳慣れないもの、「新しい命令」ではなく、むしろそれは「古い命令」であり、すなわちそれは聖書（旧約）に記された「みことば」であるとヨハネは述べています。（ちなみにヨハネがこの手紙を書いている時代にはまだ新約聖書という書物は存在しません）もちろんそれは旧約聖書全体を指すものですが、一見この分厚い書物である旧約聖書に記された「みことば」は、膨大なものであると感じてしまいます。しかしかつてイエシュアは「みことば」旧約聖書は、二つの戒めに集約することができると述べられました。

【新改訳改訂3】

マタイの福音書

22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

22:40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

「律法全体と預言者」とは、旧約聖書の総称または別称です。ですから「神である主を愛する」こと、そして「隣人を愛する」こと、この二つが旧約聖書全体の土台、中心であり、「この二つの戒めにかかっている」とイエシュアは述べられました。ですからヨハネが述べている「古い命令」とはすなわち、神を「愛する」こと、また人を「愛する」ことについてであると言えます。

2:8 しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

「古い命令」である旧約聖書の「みことば」すなわち神と人を「愛する」こと、これをヨハネは「新しい命令」として書き送ると述べています。そしてそれは「キリスト（すなわちメシアであるイエシュア）において真理」であると述べています。かつてイエシュアはこのように述べておられました。

【新改訳改訂3】

ヨハネの福音書

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

ここに「新しい戒め」新しい命令が、イエシュアから弟子たちに与えられています。その内容は「古い命令」と同じく、「愛する」ことであることが解ります。このように、「古い命令」であり且つ「新しい命令」である「みことば」聖書とは、神が人を「愛する」、人が神を「愛する」、そして人が人を「愛する」ことを土台、中心とした書物であると言えます。ですから、もし「聖書とはどんな書物ですか？」とたずねられたら、「それは愛することについて書かれた書物です」と答えて差し支えないと思います。しかし肝心の「愛する」という言葉の意味をどう捉えるかが問題になってきます。「愛する」とは一体何でしょうか。その昔、恵さんは夫である銘形先生に「ねえ、私のこと愛してる？」と尋ねたところ、先生はこれに答えず、「愛とは何だ？」と逆に問い返したそうですが…。「愛、愛する」とは一体何なのでしょう。その意味を改めて考えたいと思いますが、聖書にその答えを求めなければなりません。愛についての説明として有名な箇所はコリント I 13 章ですが、これは新約聖書の書簡です。ということはこれを土台として聖書全体に貫かれた「愛する」ことの意味を捉えることは不適切だと考えられます。なぜなら新約聖書は旧約聖書を土台として、これを説明、補足するような形で書かれた書物だからです。ですから「愛する」ことの起源、その本来の意味を知るにはやはり旧約聖書からそれを求める必要があると考えられます。

旧約聖書の原語ヘブル語で「愛する」ことをアーハヴ(אהב)と言います。聖書で初めてこのアーハヴが使われた出来事に目を留めたいと思います。なぜなら、その出来事を説明し、言い表すためにアーハヴ「愛する」という言葉がつくられ、生み出されたと言えるからです。まさにアーハヴの起源、原点と言える以下の記述からその意味を考えてみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記

22:1…神はアブラハムを試練に合わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

これは神がアブラハムに試練を与えられた場面です。ここでアブラハムが、その一人息子であるイサクを「愛している」という事実について、初めてこのアーハヴが使われ、その事実が言い表されました。ここで覚えなければならないことは、アブラハムがイサクを「愛する」ことは、普通一般の父親の持つ愛情、親子愛とは全く次元が違うものであるということです。なぜならアブラハムにとってイサクとは、神のアブラハムと交わされたご契約、ご計画を指し示す存在であったからです。

【新改訳改訂3】

創世記 17:19 すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。

「イサク」という名は、アブラハムではなく神によって名付けられたものです。イスラエルの父祖を示すアブラハム、イサク、ヤコブの中で神に名付けられたのは彼だけで、またアブラムはアブラハム、ヤコブはイスラエルに改名しますが、このイサクだけは生涯変わりません。このように、イサクとは、神がアブラハムの子孫に立てられた「永遠の契約」すなわち決して変わることも、破られることもない約束、揺るがされることなく、神によって必ず果たされる、神のご計画を指し示す存在だと考えられます。ですからアブラハムはイサクという一人の子ども、一個人を「愛した」というだけではなく、神が立てられたご契約、ご計画をアーハヴ「愛した」と考えられます。

## 2. 初めの愛

つまりアーハヴ「愛する」とは本来神に対して、あるいは人に対してというような存在に対して向けられるものではなく、神のご計画「永遠の契約」に対して向けられる思い、そして行為、生き方であると考えられます。神のご計画とは、神ご自身が立てられ、神によって成し遂げられる、神の所有、神のもので、ですからアブラハムはその象徴であるイサクを、自分のものではなく神のものとして捉えていたので、何の躊躇もなくイサクを神にささげるために、彼を連れてモリヤの地に行くことができたのだと考えられます。このように、アーハヴ「愛する」とは本来、神の立てられたご計画に目を留める考え方と行為であり、世間一般的に扱われている愛の概念とは全く違うものであることが解ります。ヨハネは自身の最後の著書であるヨハネの黙示録の中で、このアーハヴ「愛する」ことの本来の意味、最初の意味から離れてしまった教会について記しています。

【新改訳改訂3】

ヨハネの黙示録

2:1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。

2:2 「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。

2:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

2:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは**初めの愛**から離れてしまった。

ここに記されている「エペソにある教会」とは、忍耐強く、困難に負けない、一見すると強い信仰を持った教会であったことが解ります。しかしこの教会は神に非難されています。その理由は「初めの愛から離れてしまった」からだと記されています。この「初めの愛」を聖書に最初に記されたアーハヴすなわち神の立てられたご計画に対するものであると考えるならば、今日どれほど多くの教会とクリスチャンが、このエペソの教会のように、一生懸命に信仰生活を歩んでいるにも関わらず、神の非難の対象となっているだろうかと思わされます。

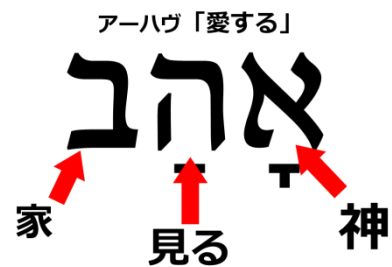
アーハヴとは神のご性質、存在を表す文字アーレフ(א)と、窓を象り「見る、目を留める」ことを意味するヘー(ה)、そして家を象り「神の家、神の国」を指し示すベート(ב)、これら三つのヘブル文字が組み合わさった言葉であり、これらの意味を合わせると「神の見る、目を留められる家、御国」という意味を導き出すことができます。つまり神はご自分の家、国をつくる、建てるという目的、目標、ご計画をお持ちであり、それに目を留め、それを目指

して進んでおられるのだと考えられます。ですから私たちが世間一般的な愛で神を愛し、人を愛して努力し、また忍耐しようとも、この「初めの愛」である神の立てられたご計画から離れるなら、目を逸らすなら、教会は神からの祝福とともに非難をも受けることになると考えられます。このような教会がどのようなになってしまうかが以下に記されています。

【新改訳改訂3】

ヨハネ黙示録 2:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

本論から逸れるため、今回はこのみことばの深い意味については触れませんが、「初めの愛から離れてしまった」教会が、決して良い状態にならないことだけは確かです。それよりもむしろ教会にとって「初めの愛」がいかに必要であるかということ覚えなければなりません。神を信じていると言いながら、その



神が見ておられるもの、成そうとおられるご計画を見ない、信じない、知らないというのは、たとえもし神が非難されなかったとしても、それ自体が不幸であり悲しむべきことではないでしょうか。

### 3. 光とやみ

2:9 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。

2:10 兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。

「光」オール(ἰὸς)と「やみ」ホシエフ(ἡσυχία)、聖書においてこの二つの存在は、神の天地創造の初め、第一日に初めて登場する、神のご計画の象徴として最も代表的な存在です。そこからこの記述の意味を考えてみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

このように、「光」とは「神は…見て良しとされた」存在であり、一方「やみ」はその光と「区別された」分けられた、異なるものとされた、すなわち神は「やみ」に目を留められず、また「良しとされ」なかった、先ほどのエペソの教会のように「非難すべきことがある」存在、「初めの愛から離れてしまった」存在、神の立てられたご計画に目を留めない、信じない、知らない存在だと言えます。そのような「やみ」の中にいる者が、どのようになるのかが次に記されています。

2:11 兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。

神の立てられたご計画を知らない者は「自分がどこへ行くのか知らない」者です。なぜならこの世界は、神がご自分の御心を成し遂げる、ただ神のご計画を完成させるために創られた世界であり、人も悪魔も御使いも、すべてはその一部にすぎないのです。ただ神の御心だけがなるのです。ですから神の御心、ご計画を知らないということは、そのご計画によって創られたこの世界に存在する「自分がどこへ行くのか知らない」ということになるのです。このように、「愛する」ことをアーハヴの持つ本来の意味で捉えるならば、ここに記されている内容の持つ意味が、決して「みんな仲良く平和に暮らしましょう」というような、世間一般でも掲げられている道徳的なメッセージではないということになります。

### 4. 罪が赦されている

2:12 子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

2:13 父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

2:14 小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。父たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

前回のメッセージで取り上げた 2:1 では、ヨハネは「私の子どもたち」に宛てて、そして今日の冒頭 2:7 では「愛する者たち」に宛ててこの手紙を書いていると述べていますが、この箇所ではヨハネは「子どもたち」「父たち」「若い者たち」「小さい者たち」にそれぞれ宛てて書かれたようになっています。なぜなら神を信じる者たち「神の子どもたち」の集まりである教会には、牧師や教師のような聖書を教える「父たち」がおり、活発に仕える「若者たち」、そしてまだ神を信じて間もない者、悩んだり弱ったりしている「小さい者たち」がいるからです。そして「小さい者たち」も力づけられ、成長して「若者たち」のようになり、「若者たち」もよく学んで「父たち」のように聖書を教えるようになるのが教会です。ですから神を信じるすべての「子どもたち」に宛てて書かれていると考えられます。そしてその内容は「あなたがたの罪が赦された」ということについてであると考えられます。つまり罪が赦されているとは一体どういう状態であるのかということとを別の言葉に置き換えて説明しているのです。上記の内容をまとめるとそれはすなわち

①「初めからおられる方」である「御父」を「知っている。」

②「神のみことば」によって「悪い者に打ち勝っている。」

ということであると考えられます。

①の「初めからおられる方」である「御父」とは、もちろんこの世界とそこに生きるすべてのものを創造された唯一の神のことです。この御方が初めからおられた、つまり計画を立て、そしてそれを始められた御方であるということであり、そしてそれを「知っている」ということです。ここで「知っている」と訳されているヘブル語はカーラト(קָרַט)と言います。この言葉は大変奇妙な言葉で、全く相反する二つの意味を持っています。それは「切る」と「結ぶ」という意味です。なぜこのような全く真逆の二つの意味を持っているのかというと、それはこのカーラトが聖書で最初に使われた箇所に示されています。

### 【新改訳改訂3】

#### 創世記

9:8 神はノアと、彼といっしょにいる息子たちに告げて仰せられた…

9:11 わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では**断ち切られない**。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」

これは有名なノアの箱舟の最後の場面です。神は地上に人の罪が増大したために、ノアとその家族以外の全ての人を大洪水によって滅ぼされました。そしてその後神はノアにこのように約束されます。「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では**断ち切られない**。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」と。ここで「断ち切られない」と訳されているのが聖書で最初のカーラトです。このように本来のカーラトは「断ち切られない」と否定する形で使われています。神に「断ち切られない」ということは、神に「結

ばれている」ということであり、神と「結ばれる」ことによって悪から、罪と滅びから「断ち切られた」ということが示されていると考えられます。つまり「初めからおられる方」である「御父」をカーラト「知っている」とは、神を「御父」と呼ぶ関係、すなわち親子の関係を「結ぶ」こと、そしてそれは決して「断ち切られない」関係であるということであり、同時にそれは「やみ」から「断ち切られ」、光の中に入れられることをも指し示していると考えられます。

また②の「神のみことば」によって「悪い者に打ち勝っている」という意味についてですが、ここで「打ち勝っている」と訳されているヘブル語はガーヴァル(גָּוַרַל)と言い、本来はこのように訳されているものです。

【新改訳改訂3】

創世記 7:18 水はみなぎり、地の上に大いに増し、箱舟は水面を漂った。

この箇所も先ほどのノアの箱舟の物語の一場面ですが、大洪水により「水はみなぎり、地の上に大いに増し」という部分に聖書で最初のガーヴァルがあります。この大洪水は地球の全面を覆い、最も高い山までもが水没したと創世記に記されています。このような意味合いでこのガーヴァルを捉えるならば、この「悪い者に打ち勝つ」とは、「神のみことば」を信じ受け入れた者たちによって、やがてこの地上の全てが支配されるということが計画されており、またそれは同時に「悪い者」すなわち神を信じない者、神の立てられたご計画を受け入れない者は、ノアの箱舟の時に起こった大洪水のように全て水の底に沈む、つまり滅びることが示されていると考えられます。このように、「あなたがたの罪が赦されている」とは、世間一般の法律で言うところの有罪、無罪という類のものではなく、神の立てられたご計画と、神の裁きを指し示したものであると考えられます。

## 5. 世

2:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。

2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

ここで取り上げられている「世、この世」とは一体何でしょうか。ヘブル語でこれをオーラーム(אֵרָאָם)と言います。本来この言葉は「永遠」と訳されています。

【新改訳改訂3】

創世記 3:22 神である【主】は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

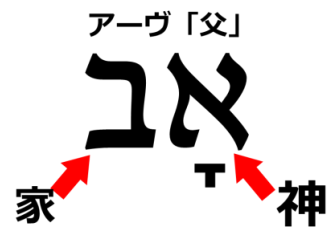
最初の人であるアダムとその妻エバは、神の命令に逆らい、決して食べるなど言われた「善悪を知る知識の木」の実を取って食べてしまいました。これによって人は神の前に罪ある者となり、神は人を「永遠に生きないように」、つまりやがて必ず死ぬ者とされました。このようにヘブル語のオーラームが指し示す「世、この世」とは「永遠に生きない」もの、やがて朽ち果てて終わるもの、死んでいく、滅びていくものという意味があると考えられます。ですからヨハネも次のように述べています。

2:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。

「世」を愛する、「世」にあるものを愛するとはすなわち「滅び去る」ことを愛するということです。愛するとはアーハヴと言い、神の立てられたご計画を指し示すものであると述べました。ですから「世」を愛する、アーハヴとするということは、神の立てられたご計画を「滅び去る」ものとする、捨て去る、忘れ去る者であるという意味と考えられ、このような者はまさにこの「世と世の欲」とともに「滅び去る」ことが示されていると考えられます。「しかし、神のみこころを行う者」すなわち「御父を愛する愛」を持つ者は、「いつまでもながらえます。」つまりかつてのアダムとエバがエデンの園においてそうであったように、神とともに永遠に生きる者とされるのです。

## 6. 御父

多くの人、いやほとんど全ての人「この世」において成功したい、幸せになりたい、お金持ちになりたいと願い、それを得るために生きています。また「この世」において賢くなりたい、有名になりたい、賞賛されたいと願い、それを目指して生きています。また「この世」にあるあれが欲しい、これが欲しいと思って、そのことばかりを考えて生きています。しかしもう一度言いますが「世と世の欲は滅び去ります。」どんな天才や優れたアスリートやアーティストでも、やがて必ずその能力は低下し、引退を余儀なくされていきます。彼らに限ったことではありません。私たちのような普通の人でも、今までできていたことがやがてできなくなり、覚えていたことを忘れ、「この世」そのものから「引退」していくのです。ある人によってはそれがいきなりやって来たりします。先日この教会によく来られていた大場浩さんが突然亡くなりました。37歳という若さでした。このように、この世界の、地球の終わりはまだまだ先のこともかもしれませんが、あなたにとっての「この世」の終わりは今日かもしれないし、明日かもしれないのです。それが「世と世の欲は滅び去ります。」という言葉の持つ意味です。ですから神は「この世」ではなく「御父」に目を向け、これを求めるように言われます。この「御父」とは単なる父親、お父さんという意味だけではありません。ヘブル語でこれをアーヴ(אב)と言います。神のご性質、存在を表す文字アーレフ(א)と家を象った「家、国」を表す文字ベート(ב)が組み合わさった言葉であり、そこには「神の家、神の国」という意味が表されているのです。つまり「御父」を求めるとは、決して終わることのない永遠の「神の家、神の国」に目を留め、そこに入ることを求めるということであり、そのような視点、考え方をもって「この世」を生きるようにと、神は私たちを導いておられるのです。ですからイエシュアもこう言われています。



### 【新改訳改訂3】

マタイの福音書 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

「神の国」とそこに入るに相応しい、正しい「義」とされることを、日々求めてまいりましょう。